

スポーツと政治 ーオリンピックの実際ー

中村雄二

1. 緒言

2013年9月7日、ブエノスアイレス(アルゼンチン)で行われた第125次IOC総会において、有力視されていたイスタンブール(トルコ)、マドリード(スペイン)を抑え、オリンピックの地として日本が選出された。東京都で行われる第32回夏季オリンピックの決定である。

アジアで開催される夏季オリンピックとしては、2008年の北京オリンピック以来、12年、3大会ぶりとなる。東京での開催は、前回の1964年東京オリンピック以来56年ぶり2回目で、アジア初の同一都市による複数回開催となる。なお、日本でのオリンピック開催は夏季・冬季通じると、冬季開催となった1998年長野オリンピック以来22年ぶり4回目にあたるという。

各競技の選手、コーチやメディアだけでなく、日本中ひいては世界中の人々が、東京オリンピックを注視している。オリンピック開催地決定の瞬間は、誰もが喜びを全身で表現し、招致活動におけるフリーアナウンサー滝川クリステルのプレゼンテーション「おもてなし」¹は、その年の流行語大賞までにもなった。一方、我が国におけるオリンピック開催を反対する声も少なくない。

そこで本研究では、オリンピックに焦点を絞り、スポーツ活動における政治的意図の影を参考にすることを目的とする。

先行研究として、以下の三つの研究が挙げられる。

- 1)伊藤 公、1994年、「近代オリンピック100年の歩み」、ベースボールマガジン社出版
- 2)マイケル・ペイン、保科京子・本間恵子訳、「オリンピックはなぜ世界最大のイベントへと成長したのか」、サンクチュアリ出版
- 3)坂上康博、2001年、「スポーツと政治」、出川出版社

これらの研究は、オリンピックの実施および招致活動について明らかにした優れた研究である。しかしながら、オリンピックの活動が実際にどのような影響を明らかにしたのかという詳細に迫った研究は、管見の限りでは見当たらない。

したがって、本研究ではこれらの重要な先行研究を参照し、より具体的なオリンピックの存在意義に迫っていこうとするものである。本研究の意義はその点にある。

2.オリンピックの意義

近代オリンピックはフランスのクーベルタンの呼びかけで、始まったとされる。『スポーツを通して心身を向上させ、さらには文化・国籍など様々な差異を超え、友情、連帯感、フェアプレーの精神をもって理解し合うことで、平和でよりよい世界の実現に貢献する』²と古代オリンピックの復興を考えたのである。このクーベルタンの考え方はオリンピズムと呼ばれ、この考えを普及する運動であるオリンピックムーヴメント³が盛んに提唱されている。⁴

第1回大会は1896年アテネで開催され、9競技43種目、14カ国から241名の選手が参加した。上記に示したオリンピズムは、現実的にはナショナリズム⁵とアマチュアリズム⁶が交錯し、支配されていく。この考え方を背景として、オリンピック出場国は増加の一途をたどることとなった。第二次世界大戦後は、メディアによる放映やスポーツ選手の社会的評価の変化などにより、出場資格をアマチュアに限定することは不可能になり、1974年のオリンピック憲章ではアマチュアの言葉を削除し、プロ選手が参加出来ることとなった。オリンピックの商業化による財政の安定化、放映権料のアップや企業スポンサー制度を導入。こうしてオリンピック競技会は、数を重ねるごとに世界中から注目されるビッグイベント化していくこととなる⁷。

3.オリンピックの課題

1)ミュンヘンオリンピック事件概要

次にミュンヘンオリンピックに焦点を合わせてみる。

オリンピックのような世界的なイベントは、海外からも多くの観光客が集まることになる。テロリストにとっては、こんなにも世界中の人々が集まるのはめったにないことだ。過去のオリンピックにもこのような問題が発生していた。それは歴代オリンピックの中でも史上最悪の出来事とされるミュンヘンオリンピック事件である。

この出来事は1972年9月5日4時40分頃、ミュンヘンオリンピックの選手村へ「黒い九月」というテロリストメンバー8名が⁸、敷地のフェンスを乗り越えて侵入した。メンバーは持ち込んだAK-47等の自動小銃や手榴弾などで武装・覆面したうえで、選手村内のイスラエル選手団宿舎へ侵入した。このとき彼らがフェンスを乗り越えているのを目撃している警備

員がいたものの、夜間に外出した選手たちが人目を忍んで戻ってきたただけだと気に留めなかったという。

犯人グループは上階のイスラエル選手団居住フロアに侵入、抵抗したユダヤ系アメリカ人選手とレスリングのコーチ、モシェ・ワインバーグの2名を殺害し、死亡したワインバーグを庭先へ放置した後、9名を人質に取った。なおこの襲撃時に1人は窓から飛び出して脱出しており、彼が一時拘束された中での唯一の生存者である。午前5時30分ごろ、警察官がワインバーグの遺体を発見し、その際に立てこもる黒い九月側に気づき、事件が発覚した。黒い九月の犯行グループは宿舎から2ページの宣言文からなる犯行声明を警察側へ投げ入れ、イスラエルに収監されているパレスチナ人234名⁹を、午前9時までに解放するよう要求した。この事件は、午前6時20分にはテレビの生中継で報道が始まり、事件の最後まで実況中継されることとなった。

やむを得ず、地元警察は時間を稼ぐため交渉を行なうことにした。午前8時45分ごろ、ミュンヘン警察本部長はオリンピック関係者2人とともに玄関先で犯行グループのリーダーと交渉を行い、まだイスラエル当局と協議中であることにし、期限を午後0時まで延長させた。ただし、解放されなければ人質2人を射殺する条件であった。西ドイツは、事件発覚直後からイスラエルとの交渉を開始したが、イスラエルの首相ゴルダ・メリアはこの要求を拒否すると共に、イスラエル軍部隊による事態解決を西ドイツに打診するが、西ドイツの法律は外国軍の国内での活動を制限していたこともあり、西ドイツ側は自国で対応するとして拒否した¹⁰。

これにより西ドイツ当局は交渉による解決を一切断念することに追い込まれ、武力のみの解決を強要されるほかなかったのだ。しかし、この時点では当局側は犯行グループの正確な人数が判っていなかったため、イスラエルと交渉中であると騙し、何度も期限延長させていた。午後5時頃、当局側はオリンピック関係者を人質の確認と称して宿舎へ潜入させることに成功した。

オリンピック関係者がそのとき見た犯行グループのメンバーの人数は5人であることから、当局側は5人と断定して突入の準備を行い、地元警察側に突入部隊を編成して突入直前までいったが、テレビやラジオで実況中継されていたため、犯行グループに気がつかれてしまい中止することになった。その後、交渉が行なわれ、犯行グループは飛行機でエジプトの首都カイロへ脱出することを要求し、当局はそれに合意した。午後10時ごろ、犯行グループと人質は宿舎の地下から当局が用意したバスで宿舎から200m離れた草地へ移動、そこから2

機のヘリコプターで空港まで行き、その後は用意された飛行機に乗り移って国外に脱出する手筈であった。

だがこれは表向きの話で、実際はバスでの移動途中、もしくは空港で犯人グループを狙撃し、人質を解放する計画であった。

午後10時30分、犯行グループと人質を乗せたヘリコプターがフルステンフェルトブルック空軍基地に着陸した。基地には、犯行グループを狙撃するために警察官が待ち構えていた。狙撃する警察官は軽装で、H&K G3の一般警察用モデルを使用し、管制塔バルコニーに3人と滑走路に2人が向かい合うように配置されていた。占拠部隊のリーダーと副リーダーは、安全の確認のために、用意されたルフトハンザドイツ航空のボーイング727へ入ったが、誰もいない機内を不審に思い、ヘリコプターへ走って逃げた。その時、滑走路上の狙撃手の1人が発砲し副リーダーは太ももを負傷したが、リーダーがヘリコプターまでたどり着き、双方が応戦を始めて銃撃戦になった。占拠部隊はヘリコプターに立てこもり、狙撃手も応援部隊を待つことにした。

午後11時30分頃、警察の応援部隊が到着した。ゲリラの1人が手投げ弾で自爆し、人質が乗ったヘリコプターが爆発、炎上した。人質たちは、両手を後ろ手に縛られ、目隠しのまま、数珠つなぎにされていたため逃げるができなかった。結果的に人質9名全員と警察官1名が死亡するなどして事件は最悪の結果で終結した。犯人側は8名のうちリーダーを含む5名が死亡し、残りの3名は逃走を図るが、その後逮捕された。だがこの3名は同年10月29日のルフトハンザ航空615便ハイジャック事件で解放されることになる¹¹。

イスラエルではオリンピックの中止を求めるデモも起きたが、反ユダヤ的言動で知られたアベリー・ブランデーIOC会長により続行が指示された。

オリンピック・スタジアムで8万人の観衆を集めて、イスラエル選手団の追悼式が行われた。そしてオリンピックは34時間ぶりに再開された。

しかしなぜ人質を1人も救出することができず全員が犠牲になってしまったのか。それは以下のようなことが人質救出作戦の失敗要因であると考えられる。

まず、救出作戦に従事した警察官のほとんどは地元警察の一般警察であり、現場指揮官や実行者には、テロ対策などの高度な専門訓練を受けた経験がほとんど無く、現場の指示や犯行グループとの交渉が遅れてしまった。

情報が不足していた上、マスコミの実況中継で警察の動きは犯行グループ側に筒抜けになっていたということ。基地には簡易な作業灯しかなく、強力な照明装置や暗視装置等が無か

ったにもかかわらず深夜の狙撃を断行したが、狙撃手の銃はスコープの付いていない一般用アサルトライフルであったため、まともに狙撃できる状況ではなかった。

さらに、犯人は5人しかいないという間違った情報から作戦を立てていたために5人の狙撃手しか用意しておらず、その狙撃手にしても射撃の成績が良いという理由で集められた警察官たちで狙撃の専門的な訓練は受けていなかったという。

上記の理由から人質救出作戦は失敗してしまったと考える。

そもそもこの事件の発端となったできごとは、事件の2年前に起きたヨルダン内線¹²と1970年9月6日に起きた、それに伴うハイジャック事件の後、旧西ドイツが実行犯を釈放しなかったことが背景にあると考えられる。

まさにオリンピック史上歴史に残る最悪の事件となってしまった。

2) 第二次世界大戦とオリンピックとのつながり

オリンピックによって起こされたと思われる出来事がほかにもある。それは全世界的規模で行われた巨大戦争、第二次世界大戦である。

この歴史的大きな戦争の裏側にはスポーツが関係しているのではないかと考えられる。

それには、1932年のロサンゼルスオリンピックと36年のベルリンオリンピックでの日本、ドイツ、イタリアの不気味な仮説によって説明ができる。

第二次世界大戦は1939年から1945年の6年間ドイツ、日本、イタリアの三国同盟を中心とする枢軸国陣営と、イギリス、フランス、ソビエト連邦、アメリカ、および中華民国などの連合国陣営との間でおこなわれた。

ヨーロッパでイタリアにつづいてドイツが降伏した後、連合国軍にとって残された敵はただひとつ、日本であった。第二次世界大戦はこの最後の敵である日本の降伏によって終結したのだ。

そもそも、日本はなぜ第二次世界大戦を引き起こしたファシズム国家の一員になってしまったのだろうか¹³。この問いには、やはり私たち日本人である限り避けては通れないものであろう。そこで、スポーツを通じてこの問いを考えることにした。

まず、1932年のロサンゼルスオリンピックと36年のベルリンオリンピックにおける上位10カ国のメダル獲得数を、第二次世界大戦の道のりを念頭において眺めてみると、日本、ドイツ、イタリアの活躍がなんとも不気味である。ロサンゼルスオリンピックで、200名近い大選手団を派遣し、計18個のメダルを獲得してスポーツ新興国として名乗りを上げた日本。そこには、満州事変によって悪化したアメリカの対日感情を好転させるという外交政策上のねらいが込

められていたが、さらにベルリンオリンピックではナチス・ドイツの要請に応じて、250名近い史上空前規模の大選手団を送り出した。1924年のパリオリンピック以降、つねに5位以内に入っていた世界のスポーツ強国イタリアは、34年と38年のサッカーワールドカップで2連覇を果たしたサッカー強国でもあった。そのイタリアが、オリンピックのメダル数を伸ばして順位をもっともひき上げてきたのも、ロサンゼルスオリンピックとベルリンオリンピックであった。そして、なによりも際立っているのが、ベルリンオリンピックで金33個、銀26個、銅30個を獲得し、世界ナンバー1の座に駆け上がったドイツの驚異的な活躍である。そこには開催国の優位性だけでは説明がつかない、ナチス・ドイツの強烈な自己主張が見て取れるのではないだろうか。

3) オリンピック開催国

それとともに見落としてはならないのが、オリンピック開催国の推移である。36年がベルリンであったが、40年は東京で開催されることが国際オリンピック委員会 (IOC) で正式に決定されており、イタリアも44年の開催国に名乗りを上げていたのだ。第二次世界大戦の勃発によって、結局40年、44年の両大会は中止となったが、ベルリンオリンピックが開催された時点にさかのぼれば、ドイツ→日本→イタリアという順番でオリンピックが開催される可能性が濃厚であったのだ。1930年代後半、日本、ドイツ、イタリア三国は、スポーツの分野で世界の主役の座を射止めようとしていたのであり、さらに40万人収容の巨大スタジアムの建設を命じたヒトラー個人についていえば、東京オリンピック以降はすべてのオリンピックをドイツで独占的に開催するつもりでいたのだった。このように世界平和を目的とするオリンピックが、逆にファシズム国家のパフォーマンスの場となり、第二次世界大戦の道を突き進む跳躍台となってしまったのではないか。

あるいは、もし日本、ドイツ、イタリア三国がロサンゼルスオリンピックやベルリンオリンピックで大した活躍もせず、オリンピックの開催国にも選ばれず、自信を喪失していたとすれば、あのような無謀な戦争へとつき進むことはなかったのではないかと考えられる。

4. 結論

上記の例のようにオリンピックがもたらす世界への影響には凄まじいものがある。しかしどちらも二度と起こしてはならないというのは明白であろう。しかし未来のオリンピックでそれらの問題が起こらないとは言えないものだ。世界にはまだまだ多くの問題を抱えている。自分たちの主張を伝えるべく世界の目をむかせる為、オリンピックを利用してくるデモやテロが起

こるかもしれない。そのためにもオリンピックやワールドカップなどのイベントでテロ対策の強化を行う子は無論大事なことである。しかしそれだけでは問題が繰り返して起こる可能性もある。そもそもオリンピックの意義にあるようにスポーツを通じて平和な社会の建設という目的がもっともである。普段から他国との関わりが少ないがスポーツを通じて世界中の人のことを知り、学び理解する必要がある。そして世界各国の代表選手は金メダルという世界のトップの証を目指している。我々国民は皆で健闘を祈り、喜び合い他国の選手を褒めたたえるべきである。そして世界のトップアスリートの競技をみて次世代の子供たちに影響をあたえられれば懸命だ。国、人種は違え、皆に尊敬されるような選手、スポーツのすばらしさを知り、夢を与えることが大切なことではないだろうか。国の財政、利益だけに左右されるのではなく、クーベルタンの近代オリンピックの思想を今一度考える必要がある。

5. 今後の課題

本研究では、これまで明らかにされてこなかったオリンピックの理念とその現実との差を検証してきた。考察の結果、オリンピックの理念と現実との間には大きな差があり、再考する時期にきていることがわかった。しかしながら、より細かな部分までは検討できなかった。これに関しては、今後のオリンピックを注視することで、より具体的な内容にせまることができるだろう。それは今後の課題としたい。

注

1 日本で有名な美人アナウンサーと知られている滝川クリステル。アナウンサーをすることもあり、国際オリンピック委員会の公用語であるフランス語で日本をプレゼンテーション。「おもてなし」とはその内容に含まれていたせりふ。

2 公益財団法人、日本オリンピック委員会、[JOC・オリंपィズム | クーベルタンとオリंपィズム](http://www.joc.or.jp/olympism/coubertin/)、<http://www.joc.or.jp/olympism/coubertin/>

平成 27 年 10 月 14 日アクセス

近代オリンピックの創立者、フランスのピエール・ド・クーベルタン男爵。

3 スポーツを通じて友情、連帯、フェアプレーの精神を培い理解しあえることにより世界平和を目指す運動。

4 古代オリンピックは紀元前 760 年、ギリシャのオリンピアで初めて開催された。その後 1200 年間、紀元前 393 年の第 292 回オリンピック大会まで続いたが、キリスト教のローマ帝国デオドシウス帝が、異教信仰を禁止したことで、大会は

5 民族、国家に対する個人の世俗的忠誠心を内容とする感情もしくはイデオロギー。

6 スポーツなどを、営利を目的とせず、趣味として純粋に愛好しようとする考え方。アマチュア精神。

7 オリンピックをショービジネス化し、スポンサーを「一業種一社」に絞ることにより、

スポンサー料を吊り上げ、聖火リレー走者からも参加費を徴収することなどにより、黒字化を達成したのである。

8 伊藤 公、「近代オリンピック 100 年の歩み」、ベースボールマガジン社、1994 年、P 196～199 参照

9 日本赤軍の岡本公三やドイツ国内で収監中のドイツ赤軍幹部

10 イスラエルの特殊部隊派遣は西ドイツ側に侮辱だとして受け取られてしまうと思ったために、打診すらしなかったという。

11 パレスチナ解放人民戦線のメンバー 4 人によって乗っ取られた連続テロ事件。

12 イスラエルのせいで起きたヨルダンとパレスチナの内線

13 イタリアのベニート・ムッソリーニと彼が率いた国家ファシスト党が提唱した思想や政治運動である。

キーワード

「オリンピック」、「クーベルタン」、「オリンピックの意義」、「オリンピズム」、「ミュンヘンオリンピック事件」、「第二次世界大戦」、「IOC」、「オリンピック開催国」、「オリンピックの課題」、「オリンピックの政治的利用」

要約

2013年9月7日、ブエノスアイレス(アルゼンチン)で行われた第125次IOC総会において、有力視されていたイスタンブール(トルコ)、マドリード(スペイン)を抑え、オリンピックの地として日本が選出された。東京都で行われる第32回夏季オリンピックの決定である。

本研究では、オリンピックに焦点を絞り、スポーツ活動における政治的意図の影を参考にすることを目的とする。

これらの研究は、オリンピックの実施および招致活動について明らかにした優れた研究である。しかしながら、オリンピックの活動が実際にどのような影響を明らかにしたのかという詳細に迫った研究は、管見の限りでは見当たらない。

したがって、これらの重要な先行研究を参照し、より具体的なオリンピックの存在意義に迫っていかうとするものである。本研究の意義はその点にある。

本研究では、これまで明らかにされてこなかったオリンピックの理念とその現実との差を検証してきた。考察の結果、オリンピックの理念と現実との間には大きな差があり、再考する時期にきていることがわかった。しかしながら、より細かな部分までは検討できなかった。これに関しては、今後のオリンピックを注視することで、より具体的な内容にせまることができらう。それは今後の課題としたい。